

アルチュセールとプーランツァスの 国家論における差異について

桑野 弘隆

はじめに

本論文は、ルイ・アルチュセール (Louis Althusser) およびニコス・プーランツァス (Nicos Poulantzas) を中心にとりあげ、アルチュセール学派によるマルクス主義国家論への貢献を検証したい。

はじめに、アルチュセール派国家論のプロブレマティックを確認しておきたい。その問いは、社会構成体を認識するための鍵概念として、「複合的全体」という概念をアルチュセールが導入したことによってはじまる。アルチュセールは、社会構成体の構造解明には、トポロジーという哲学的比喩が導入されなければならないと主張した (Althusser 1972 208)。なるほどマルクス主義理論には、建物の比喩を用いて、土台 (下部構造) と上部構造からなる構造体として社会構成体を思考してきた歴史がある。しかし、建物の比喩を用いることの理論的意味は、はっきりと認識されないままであった。たいしてアルチュセールは、「建物の比喩」は、諸審級からなる複層的な結合体として社会を認識するプロブレマティックを導くものと明確化したのである。さらにアルチュセールは、社会構成体の概念として「支配関係をもって分節された全体」 (Althusser 1965 206) を導き出した。この概念によって、社会構成体は「相対的に自律

的なレベルないし審級が複合的構造的統一のなかで共存し、相互に分節され、最終審においては経済によって決定される全体」 (Althusser 1965b 280-281) として捉えられることになったわけである。こうして、アルチュセール派のプロブレマティックの中心に位置づけられたのは、社会構成体をなす各レベルないし各審級——法的諸関係、国家、イデオロギーそして土台など——が、一方では生産諸関係によって最終審級において決定されながらも、他方では相対的自律性と独自の効力を有するという問題であった (Althusser 1965 111)。すなわち、ある社会構成体を十全に認識するためには、それを構成している各審級それぞれの精密な解明、ならびにそれらが節合されるありかたが解明されなくてはならない。なかんずく、後者の問いは重要である。ここから重要な問いが派生する。一体、資本と国家はいかなる関係にあるのだろうか？

アルチュセール派の理論的貢献は、法、国家、イデオロギー、そして土台などの各審級間の節合 (articulation) 関係への問いを提起し、それを解明しようとしたところにある。マルクス主義理論は、マルクス経済学・マルクス主義国家理論を深化させ、各審級・土台それぞれの理論的探求をおこなってきた。しかし、各審級・土台間の節合・関係についての解明は、不十分な

ままにとどまっている。とくに、資本主義国家が資本制生産にたいしどのような関係を有するのかという問題は十分掘り下げられないままであった——観念論的な「反映論」を除いては。資本と国家との節合関係についての認識を推し進めたこと、これがアルチュセール学派の功績である。

本論は、ルイ・アルチュセールおよびニコス・プーランツァスの国家理論をとりあげ、二つの理論が、国家と資本の節合関係をどのように捉えているか、比較・検討する。両者の国家理論は、1970年代後半にそれぞれ頂点に到達している。しかし、国家と資本制生産の関係、そして国家と階級闘争の関係についての両者の認識は、ほとんど両極に位置するようにも見える。本報告の課題は、アルチュセールとプーランツァスにおける国家論における差異が、マルクス主義理論史においていかなる意味をもつかを明らかにすること、またこの対立から産み出される国家論における理論的前進がいかなるものであるか見極めることにある。

1 プーランツァスの場合

1. 資本主義国家の機能

アルチュセールのプロブレマティックのうえで独自のマルクス主義国家論を展開したのが、ニコス・プーランツァスであった。プーランツァスは、『政治権力と社会諸階級』(Poulantzas 1968)において、資本主義国家という審級が、社会構成体という構造全体のなかで担う機能を解明するとともに、他方でその自律的効力を分析したのだった。そこで、プーランツァスが見出したのは、資本主義国家の次のような機能であった。はじめに孤立化作用がある——すなわち、国家は、大衆の政治的連帯を粉碎し経済的・政治的孤立を促進することによって、諸個

人を市場競争関係のなかに投げ込むのである。ひるがえって、国家は権力ブロックを構成する。すなわち、政治的支配諸階級が一ヘゲモニー分派の庇護下に「権力ブロック」へ組織されるよう介入する。このようにして、資本主義国家は社会の階級分裂状態を維持・保存するのである。こうして搾取の諸条件を保障するのと引き替えに、国家は蓄積された資本に寄生し、その身を養う。

ところが逆説的ではあるが、国家は階級闘争の激昂の結果、社会構成体が内破してしまわないよう細心の注意を払わなくてはならない。よって孤立化を梃子としながらも、資本主義国家は、形式的には自由で平等な法的主体の抽象的集合体としての「民族－国民」(peuple-nation)を呼び集める。結果、国家は諸階級に分裂した社会にたいして社会的凝集性ないし統一性を確保するという機能を担う(たとえば、社会的統合の回復のためナショナリズムがしばしば利用されてきた)。もとより、この社会的凝集性・統一性は想像的なもの——しかしながら、同時に強固な物質性を帯びてもある——にとどまるものではあるのだが。

そして、国家がこれらの機能を担いうるのは、資本制生産様式から経済外的強制が分離され、国家のもとに暴力が独占されていること、いいかえれば、政治領域と経済領域が分離されていること、そして国家が支配階級からも従属階級からも相対的な自律性を確保し、ときには「調停者」の意匠のもとに階級闘争に介入するからであるとプーランツァスと考える。たとえば、資本主義国家以前の国家は、経済過程に経済外的強制暴力を用いて介入しなければ収奪を遂行しえなかった。ゆえにそれは特定身分の国家としてしか現れることはできず、諸階級の調停者、ましてや「公共の利益」の担い手を装うことは到底不可能であった。このような認識は、『家

族・私有財産・国家の起源』におけるエンゲルスの国家認識、すなわち社会の階級分裂の産物であり、同時に階級闘争の調停者という認識を精緻に発展させたものと言えよう。

資本主義国家は大衆の政治的かつ経済的な連帯を破碎しつつ、同時に「民族—国民」を呼び集める、というプーランツァスの認識は、現在ますますその正しさを証明しつつあるように思われる。一時期、国家社会主義の敗北、市場経済の勝利が喧伝され、「小さな政府」は歴史の必然とされた。しかし、事実はその逆であった。資本の支配が極まるにつれて、社会における「国家的なもの」の領域はむしろ拡大しつつあるからである。カール・ポランニーの研究から明らかなように、貨幣—商品経済の社会への浸透は共同体的・宗教的な抵抗にあうのであり、資本制生産が支配的な生産様式となるのは容易なことではない。そこで国家は、共同体的・地縁的諸関係を解体しなければならない。これがいわゆる「原始的蓄積」の真の意味である。したがって、「原蓄」とは、歴史的な一回性の出来事ではなく、資本制生産の拡大があるところ必ずや繰り返されなければならない国家介入である。だが、資本制生産の支配が進行するにつれ、共同体や家族の解体は、社会構成体の再生産そのものを脅かすまでに至る。結果、家族そして共同体は、問題解決能力を失い、ますます国家に依存するようになっていく。ソーシャルワーク、介護制度、家庭裁判などの諸制度は、国家的なものによる介入のともどもない拡大を示している。そして、「民族—国民」は、共同体・家族の解体によってアトム化された諸個人にたいし、想像的な紐帯を与えるべく国家が利用するものである。

2. 生産諸関係という支配関係の発見

では、後期プーランツァスの国家論プロブレ

マティックとはどのようなものか。後期プーランツァスの国家論の到達点として先ず取りあげべきは、「資本制生産諸関係における〈政治的なもの＝国家〉の内在」というテーゼであろう。前期プーランツァスの国家論がエンゲルスのそれに基づくものであったとすれば、『国家・権力・社会主義』の国家論は、『資本論』第三卷「資本主義的地代の生成」章において現れた認識に端を発している。そこでのマルクスは、国家形態の「最奥の秘密、隠された基礎」が、直接生産者からの剰余価値の収奪形態にあると主張している。すなわち、マルクスは、生産諸関係から国家形態が派生する、というテーゼを打ち出したのだった (Marx 1989)。プーランツァスも、「生産諸関係と社会的分業のなかにおいてこそ、国家および権力の物質的骨格の基礎を探らねばならない」 (Poulantzas 1978 15) こと、そして「〈政治的なもの—国家〉 (le politique-Etat) は常に、違った形態を取ることはあっても生産諸関係のうちに、したがって生産諸関係の再生産のうちに構成要素として存在する」 (Poulantzas 1978 18) ことの確認から国家論を再論している。

そこから、プーランツァスは、精神労働と肉体労働の分業という資本制生産諸関係に固有な分業形態に着目する。この「分業」への着目は、資本制生産諸関係を、経済的関係としてのみならず政治的権力関係としても捉える視圏をプーランツァスに許したのだった。そして精神労働と肉体労働の「分業」は、資本主義的な知と権力の有機的連関として明確に捉え直される (Poulantzas 1978 55)。資本制生産諸関係は、直接生産者から生産過程を組織し掌握する権能を奪う (depossession) ことを特徴とする。結果、「実力主義」や「職階制」などの意匠のもと、精神労働の担い手達に資本主義に固有な権力が集中される。そのとき、資本は生産過程を

実質的に掌握する権力として現れる。ここから、資本制生産過程において肉体労働から引き離された精神労働の要素が資本主義国家の権力構造の基礎をなす、とプーランツァスは論証した (Poulantzas 1978 20)。ここで確認しておくべきは、プーランツァスが、資本制生産諸関係を経済関係のみならず政治関係としても捉え、さらに資本制社会において一義的かつ基礎的な支配関係と捉えている点である。

プーランツァスは、資本主義的搾取の関係を、精神労働と肉体労働の「分業」と捉えたわけだが、それが分業の一種として現れるのは偶然ではない。つまり、この「分業」は優れて支配関係でもあるのだが、純粋に生産における「技術的」要請に従うものというイデオロギーを帯びて現れるのであり、そのうえ「自由な個人による契約」を基礎としているので、そもそも支配関係として認識されにくい。しかしながら、資本主義的な搾取を、抑圧や強制と峻別しながらも、支配関係の一つとして捉えるべきである。

この構えは、アルチュセールにおいても共有されているように思われる。ジャック・ビデによって編集された遺稿『再生産について』のなかで、アルチュセールは資本主義的な権力を「抑圧」でもって表象すべきではないこと、資本主義的な権力を「搾取」として考えるべきと主張している (Althusser 1995 41-71)。アルチュセールは、搾取という概念を鑄直そうとしていた。アルチュセールは、「搾取」を済学的カテゴリーのみならず、政治学的な概念としても捉え直そうとしている。しかし、それは端緒に留まっている。ここでは、プーランツァスおよびアルチュセールのプロブレマティックを引き継ぐ形で搾取という概念を考えてみたい。

資本制社会において、賃労働者達は抑圧によって強制的に労働させられているのではない。この点で「賃金奴隷制」という用語は誤解

をまねくものである。なぜなら、資本制生産は、直接労働者の自発的な創造や協働を最大限に開発・搾取 (exploit) しようとするものだからである。資本制生産においては、賃労働者は生産諸力の水準に適ったスキルを修得すること (mastery) が要請されるだけでなく、その創造力を最大限に発揮し (技術革新など)、また協働を通じて生産性を絶えず高めてゆかなければならない。しかしながら、それが「自由な個人によるアソシエーション」(マルクス)へと結実するのは許されない (資本主義企業がもっとも許容しがたいのは民主的な意志決定の手続きである)。すなわち、資本による労働過程の実質的包摂——資本の指令・管理のもと労働過程が組織されること——が必要なのであり、そのため労働者は多くの規律を身体化しなければならない。労働者のスキルと創造性の発揮は、資本が要求する諸規範 (職階・職責など) への自発的な服従 (subject) の埒内でなされなくてはならない。その結果として、労働過程における創造の諸成果は、資本が収奪しうるものとなる。

したがって、会計学的で計算しうる搾取、すなわち賃労働者には労働力の再生産がなされるだけの労賃しか与えられず、資本が剰余価値を獲得するという意味での搾取とは、搾取の一面だけを説明するものに留まる。計算可能な搾取認識の問題点は、賃労働者が十分な賃金さえ受けとれば搾取は消滅するというような経済主義的逸脱を誘発してしまうところにある。ところが、じっさいには個別資本が利潤をあげることができなくとも、政治的なカテゴリーとしての搾取は存続しうる。

ところで、マルクス主義には「経済による最終審における決定」という悪名高いテーゼがあり、アルチュセールはこのテーゼを支持している。たいてい、エルネスト・ラク라우やシャントラル・ムフが唱道するポスト・マルクス主

義は、アルチュセールでさえも精算できなかった経済還元主義の残滓として批判したのだった(97-105)。しかしながら、このテーゼが「生産諸関係による最終審における決定」へと修正をされ、ヨリ明確になったように(Althusser 1995 51)、少なくともアルチュセールを経済還元主義と批判することはできない。生産諸関係とは優れて政治学的な概念でもあるからだ。

「生産諸関係による最終審における決定」というテーゼは、搾取を資本制社会における一義的な権力関係として捉えようとするものである。経済主義というイデオロギーは、生産過程には純粋な「経済関係」があるだけ、効率と生産性を高めるための「技術的なソリューション」があるだけと嘯く。しかしながら、国家装置が駆使する抑圧などよりも、搾取＝権力は、絶えず身体に作用しその微細な所作や欲望にいたるまで管理をおこなう点において、遙かに深く広く浸透している。ここから理解されるのは、政治と経済の二分法、それから派生した政治社会(国家)と市民社会という区分そのものが疑わしいということである。

資本制生産諸関係を支配関係としても捉えるという視点は、マルクス主義国家理論を大きく前進させることになる。繰り返せば、プーランツァスは、資本制生産諸関係に内在する「政治的なもの」こそが資本主義国家の権力構造を基礎づけていることを論証したのだった。この構えは、ミシェル・フーコーの権力論との節合可能性を示唆している。周知のように、後期プーランツァスは、ミシェル・フーコーの権力論、なかんずくそのミクロ的な権力分析をマルクス主義国家論へと接合しようとしていた。フーコーによれば、「マルクスはたとえば、工場において雇用主が行使する事実上の権力が、社会のそれ以外の場所に存在していた法律的な権力(主権)に比べて、特殊であると同時に相対的に

自律性をもっており、いわば不可侵であるという性格を非常に強調している」のであり、マルクスは「これらの小さな権力地域が——所有地、奴隷、工場、また軍隊として——初めからもともと存在すると考え、そこから発して国家の大きな装置がいかにして少しずつ形成されえたのかを示した」とされる(Foucault 406-407)。プーランツァスの国家論は、事実上、フーコーの認識に応答するものである。

このように、アルチュセールとプーランツァスは、資本主義的な権力関係を解明するプロブレマティクを共有し、そこから国家装置に迫ろうとしている。しかしながら、国家装置の物質性をめぐって両者は真っ向から対立しているように見えるのである。

ところでボブ・ジェソップ(Bob Jessop)によれば、プーランツァスはしだいにアルチュセールの影響圏から離れ、その国家論アプローチは構造主義から関係主義へと移行したとされている。プーランツァスの国家論においても関係主義的なテーゼと見なすことができるのは、『国家・権力・社会主義』における「国家は、諸階級および階級諸分派間の力関係の物質的凝縮である」というものだろう。後期のプーランツァスは、国家装置が階級闘争によってつねにすでに横断されていること、したがって国家は内在的な階級的敵対と矛盾に貫かれていることを論証しようとしている。しかし、このテーゼは、国家を自律した領域として位置づけ、その固有の機能を見出そうとする構造主義的アプローチと矛盾するようにも見える。

ジェソップには、前期プーランツァスの構えは国家への本質主義的なアプローチに映ったのである。なるほど関係主義を徹底するならば、国家を自律的な領域として表象したり、その固有の機能を見出したりするのは矛盾かもしれない。後期プーランツァスにあっても関係主義的

なアプローチを徹底しきれず、「国家の自律性」という曖昧な「アルチュセール」的概念に拘泥し続けてしまったとジェソップは批判している。関係主義を徹底するならば「国家のどこかにブルジョアジーの階級支配を保障できるものがある」という国家への本質主義的なアプローチは誤りとなる (Jessop 136)。これをジェソップは、プーランツァス理論における、ミクロ的偶然性 (階級闘争の内在に起因する国家の分散性) とマクロ的必然性 (国家による階級支配の保障) の矛盾とも言いかえている (Jessop 143-144)。

なるほど後期のプーランツァスは、フーコー権力論とマルクス主義理論との節合を模索し、国家を実体視する傾向、いわゆる「国家の道具主義的理解」にたいする批判を強めてゆく。プーランツァスは、国家は、大衆闘争と対峙する対立軸でもなければ、闘争から超越している実体でもないと述べた。国家装置が階級闘争によって横断されており、そして、被支配者による抵抗と蜂起とが押しつけた限界が刻印されているゆえ、国家とは大衆闘争がつねにすでに浸透している場 (lieu) であると論証される。この場合、国家装置の作動における齟齬・矛盾・遺漏は、国家の様々な部門・組織に浸透している階級闘争の表現と見なされる。

しかしながら、この構えをジェソップが言うように「関係主義」と断定するのはいささか早計である。大衆による階級闘争が内在しているからといって、国家装置がそのまま大衆のための機関となりうるわけではないからだ。プーランツァスにあっては、資本主義国家とは肉体労働と精神労働とのあいだの資本主義的「分業」の必然的帰結であり、その前提でもあった (Poulantzas 1978 61)。プーランツァスは、国家装置は、それが大衆から徴収された人員から担われている部門でさえも精神労働を具現していると明晰に述べている (Poulantzas 1978 57)。

すでに確認したように、精神労働と肉体労働の分業とは、資本制生産に固有な支配関係に他ならなかった。したがって、階級闘争に貫かれていながらも、同時に、資本制社会に固有な支配関係の再生産に国家が関与しているとしても、ジェソップが主張するような矛盾はない。しかし、このことを十分に理解するためには、プーランツァスの立場と一見対立するアルチュセールの国家論を参照しておくべきだろう。

アルチュセールといえは、古典的かつ悪名高い国家＝道具説に拘泥しているような発言が見られる。現在、遺稿「自らの限界にあるマルクス」(Althusser 1978b) が出版され、アルチュセールの国家理論の概要が明らかになりつつある。当の遺稿では「国家の自律性」、「階級支配の道具」というマルクス主義的諸概念が吟味され、「国家は階級闘争からできる限り分離されている」というテーゼへと加工し直されている。このテーゼは、教条主義への先祖返りとも、また「構造への諸力の内在」を主張するポスト構造主義的な立場に背馳するとも受け取られかねない。しかしながら、本論はアルチュセールのテーゼに積極的な意味を見出そうと試みる。なぜなら、アルチュセールのテーゼは、本論の中心課題である国家と資本との関係を解明する端緒となるものだからである。

2 アルチュセールの場合

1. 国家論への再生産の視点の導入

「自らの限界にあるマルクス」のなかで、アルチュセールは「マルクス主義国家論がそこに突き当たったまま根本的に動けなくなっている『絶対的限界』の一つ」(Althusser 1978a 456) として再生産の観点の欠如を挙げている。なるほど、「資本主義的地代の生成」章のマルクスは、国家を生産諸関係の発現として捉え、国

家が生産関係から直に派生することを示唆していた。そして、資本制生産諸関係における精神労働の要素に資本主義国家の基礎を見いだそうとする後期のプーランツァスも、マルクスと同じプロブレマティックを共有している。しかし、アルチュセールは、生産諸関係から国家を直接演繹するのではなく、生産諸関係の再生産という観点から国家を眺めなければ資本主義国家の概念はえられないと主張するのである。

アルチュセールが問題にしようとしているのは、国家と資本とのあいだの関係性である。この関係を解明するためには、資本制生産諸関係から国家を直接に導出するのではなく、再生産という媒介が必要である、とアルチュセールは主張している。これはアルチュセール国家論のユニークさを示している。では、再生産の観点到観点に立つことによって、われわれはいかなる国家概念を手にすることができるのだろうか。

まずは、アルチュセールは、生産諸関係の再生産を保障するという機能において国家概念を大幅に拡張している。すなわち、この機能を果たす諸装置はすべて「国家的なもの」と名指される必要がでてくる。アルチュセールは、国家は可視的圏域（政府や軍）にとどまるものではないこと、歴史的に見て国家は拡大し続けてきたことに注意を促している（Althusser 1978 288）。「国家のイデオロギー装置」（以下AIEと略）という概念は、生産諸関係の再生産の観点到立つならば、国家が通念や法律上の規定より「広い」ことを教えている。さらに、アルチュセールは、国家のイデオロギー諸装置とヘゲモニー装置（グラムシ）との違いを強調していた（Althusser 1978 499-500）。なぜなら、イデオロギー装置には、「国家」という限定が不可欠だからである。アルチュセールのプロブレマティックはここでも特異なものである。「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」論

文は、じっさいには国家によるミクロ政治の位相について語っている。これまでマルクス主義理論は、政治を「国家の政治」に還元してしまうと批判され続けてもきた。マルクス主義理論は国家の外部にあるミクロな政治の位相を捨象してしまっているというわけである。ところが、アルチュセールは、国家を担い手とするミクロ政治の存在を主張している。この政治の場とは、生産諸関係に他ならない。アルチュセールは「大文字の政治＝国家／国家以外のミクロ政治」という図式を脱構築している。アルチュセールによれば、AIEが担うのは資本制生産諸関係に組み込まれる身体の規律であった。AIEが産み出すのは「観念」や「同意」ではない。資本制生産——ここでは生産・分配・消費を含む——の諸プロセスがもつサイクル・速度・リズムとシンクロナイズする身体性である。そして、AIEのネットワークは、公と私ないし政府と民間の枠組みを超えて、社会構成体に張り巡らされている。国家の政治は、中心に存在する一元的な「主体」（＝政府）によって目論まれ、遂行されるものに還元されえない。かわりに、中心なき、ミクロな次元の国家の政治——それはネットワーク型の権力形態をもつ——が存在することを認めなくてはならない。国家による政治は深く浸透し、おそらくはわれわれの身体にまで達している。しかしながら他方で、汎国家主義に陥りたくないならば、国家という戦略的な場を限界づける概念を手に入れる必要がある。それをアルチュセールは、資本制生産諸関係の再生産という機能に見出したのである。こうしてアルチュセールは資本主義国家の概念を刷新した。ところが、ここから先は複雑である。アルチュセールは、プーランツァスが乗り越えたはずの「教条」にもどっているようにも思えるからである。すなわち、アルチュセールは国家の「道具主義」的解釈を追求しようとしている。

ここがアルチュセールとプーランツァスの国家論における最大の差異である。

2. 国家の階級闘争からの分離

アルチュセールは、階級闘争によって国家は横断されていると見なす論者たちを、「彼らは国家の分離という観念に闘いを挑み、国家においては階級闘争が、たとえ見分けにくくとも何らかのかたちで働いていると納得するや、それだけでもう国家は道具であるとの観念を捨ててしまう」(Althusser 1978a 426) と批判している。アルチュセールにとって、それは国家が「特別な装置－機械」であること、「特別な身体」をもっていることを捨象してしまうことを意味した。かわって、階級闘争からできる限り分離されるよう国家が作られていることは、「国家の構造のなかに書き込まれている」(Althusser 1978a 431) と主張した。

しかしこれは教条主義への単純な回帰などではないだろう。本論は、アルチュセールのプロブレマティックを理解するためには、国家、資本そして階級闘争という三者の関係を考える必要があると考える。そして三者の関係を最も明晰に表現しているのは次のような記述であろう。

国家が階級闘争から分離されているのは、それを目的として作られる、つまり階級闘争から分離されるために作られるからである。そのように私がいうとき、そこでいわんとしているのは、階級闘争のなかに「全方位」から介入しうるために、国家には分離がなくはない、ということである。「全方位から」というのは、国家は、被搾取階級に対する搾取階級の搾取と抑圧のシステム全体を維持するために、労働者の階級闘争に介入するだけでなく、支配階

級の分裂——これは、労働者と大衆の階級闘争に勢いがあるときには、支配階級にとって大きな脅威となりうる——を防ぐために、必要とあらば支配階級の階級内部の階級闘争にも介入することがあるからである。(Althusser 1978a 427 強調－桑野)

アルチュセールによれば、国家の一義的な関心はあくまで資本主義システムの維持・保存——すなわち搾取と抑圧のシステムの再生産——にある。また他の箇所ではアルチュセールは、国家を「支配階級としてのブルジョアジーの『一般の利害』(intérêts généraux) を防衛するため、ブルジョアジーの一部、さらに大部分に抗してまで、さまざまな措置を講ずることのできる装置」(Althusser 1978a 433) と位置づけている。ここで言われているブルジョアジーの一般利害・政治的利害とは、「搾取と抑圧のシステム全体」——すなわち資本制生産諸関係である——を維持保存することと解釈するべきだろう。じっさいにはシステムの一般の利害と個人(ないし階級)の個別利害とが一致すると期待することはほとんどできない。国家は、最終的には前者の側に立つのであって、たとえ支配的諸階級を裏切り、従属諸階級に大幅な譲歩をしたとしても資本制システムが再生産されるよう介入する。すなわち、国家は、ときには階級闘争からも資本主義システムを守らなければならないのである。

階級闘争からの国家の分離のテーゼが、「階級間の調停者」というようなエンゲルスによるテーゼと似て非なるものであるのは、このように資本、国家、そして階級闘争の三者の関係を解明するものだからである。たとえば、「階級支配の道具」(レーニン) という概念に問題があるとすれば、支配階級が恣に操れる道具として国家を表象してしまう可能性があるからで

ある。アルチュセールは、道具の物質性——必ずしも使用者の思い通りにならないこと——を強調していた。あくまで、国家は階級支配の道具であって支配階級の道具ではない。たとえばアルチュセールは次のように述べている。支配階級はむしろ国家によって選別され、組織される。これはアルチュセールおよびプーランツァスに共通する認識である。それはなにより、国家が搾取と抑圧のシステムの担い手達を徴発するためである。ここでアルチュセールを補足するならば、資本主義的支配があるということは、可視的かつアイデンティファイしうる「支配階級」が存在するのを保証するものではないことを強調しておきたい。むしろ支配階級が判別されえないほうが資本主義的支配としてはより洗練されており強固である。歴史的にいつても、国家は支配諸階級から政治的権力を奪い取り、それらが経済的利害関係だけに汲々とするようし向けてきた。資本主義的支配を考えるさいに階級から始めるべきではない。支配階級の存在を前提としない階級支配——つまり社会の階級分裂に基づく支配——を考察する必要さえあるといえよう。

そもそも資本制社会における支配階級、なかでもヘゲモニー分派というものは、ある歴史的段階の資本蓄積の最適な担い手として選ばれるだけのものに過ぎず、国家との「運命共同体」などにはなりえない。この搾取のシステムの担い手である限りにおいて、支配諸階級は国家にいくらか期待することができるにすぎない。国家が特定の階級分派や個別資本にひどく傾いているとしても、それらが資本全体の指導的担い手として機能している場合に限ってのことである。国家は特定階級の守護者でもなければ階級間の「調停者」でもない。あくまでも国家の関心は、資本主義システムの維持保存と資本蓄積の推進にある。なぜなら、諸資本が世界中から

収奪する剰余価値に寄生することによって、国家はその物質的な基盤を支えているからである。

この事柄をより理解するためには、階級からはじめるのではなく個別資本からはじめるのではなく、さらに「ブルジョアジーの一般利害」というような誤解の生みやすいタームに代えて、アルチュセールが用いていない「社会総資本」という概念を導入するのが有効ではないかと思われる。個別資本は、社会総資本の利益には盲目である。ゆえにさまざまな逸脱や偏向に貫かれながらも、最終審においては、資本主義国家は社会総資本の利害に立ち、社会総資本の蓄積促進のために介入することになる。

アルチュセールのプロブレマティックにおいてえられる国家概念を整理しておく次のようになる。資本主義国家は、資本制生産の搾取と抑圧のシステム全体の再生産を保障し、利潤率の低下や資本の有機構成の高度化に配慮しながら搾取を「合理的に」強化する。ひるがえって、システムの不安定化を引き起こしかねない「法外な」収奪や独占を取り締まることによって、資本主義を「第二の自然」として諸個人に受け入れさせる。このイデオロギーの全体化が成功をおさめるとき、資本の利益は「国民的利益」、「公共の利益」となる。国家は、資本制生産諸関係の再生産を保障すべく介入し、それによって社会の階級分裂状態を維持保存する。その結果として、階級支配が再生産されるのである。

ここからアルチュセールが主張する「国家装置の階級闘争からの分離」というテーゼも理解可能になる。資本制生産システムの庇護者として、そして資本が蓄積した剰余価値に寄生する装置として、資本主義国家は大衆による抵抗と蜂起を抑圧するのみならず、権力ブロック内の階級分派闘争や個別資本間の競争的敵対、さらに個別資本の暴走にも介入しなくてはならない。

それゆえ、資本主義国家は、階級闘争から分離されている必要があるのである。さもなければ、大衆の抵抗によって、そして権力ブロックの内部分裂によって、資本主義国家は破裂しかねない。したがって、資本主義国家は、階級闘争がその内部に飛び火しないような装置でなければならない。アルチュセールは、国家が階級闘争から分離された装置であり続けるために講じる様々な仕組みと措置に注目するよう促している (Althusser 1978a 443)。

3 支配階級なき階級支配について

アルチュセールは、「国家の階級闘争からの分離」というテーゼをさらに具体的に展開するまでには至らなかった。このテーゼは、今日、どれだけの理論的な賭金に値するのであろうか。アルチュセールのテーゼを展開することによって、このテーゼから導き出せる「支配階級なき階級支配」というテーゼを本論では提案してみたい。

もはやレーニンが主張したような、「支配階級の道具」という国家認識を擁護することは難しい。しかしながら、資本主義国家が階級支配と無縁であり、「公共の利益」を実現する中立的な存在であると主張するのも資本主義国家の階級支配的な側面を隠蔽してしまうだろう。原理的な問題に立ち戻るならば、資本主義国家は租税国家である。さらにいうならば、資本主義国家をそれ以前の国家形態から決定的に区別する要素とは、それが貨幣によって運営され、最終的には貨幣の収支決算を求められる組織だという点である。ウェーバーは、近代的官僚制の十全な発達には、官吏への現物支給では足りず、棒給（貨幣）の配布を待たなければならないと指摘している。近代資本主義国家の特徴は、個人や個別資本と同じようにバランスシートに基づいた運営を迫られるのであり、ときにはデフ

ォルトにも追い込まれるという点にある。この事柄は、資本主義国家と資本のあいだの関係を考察するさいに、決定的な要因である。すなわち、国家はそこに立地する諸個別資本が取得する利潤を税という形で吸い上げている。それが国家の財政的基盤である。国民経済の衰退は、たちまちにしてその財政を逼迫させ、その政策遂行に大きな制限をかけてしまう。なるほど、国家は不況のさいには、さまざまな諸政策を打つことができる。それらは、国民の生活条件に直接影響を与えるかもしれないが、国家が新しい基軸産業、国際競争力のあるセクターを計画通りに立ち上げ、資本の利潤率向上に貢献できるかは別問題である。市場と経済全体を俯瞰し、その発展プロセスを見通せる視点を国家は持ち得ない。結局のところは、国家の諸政策が「たまさか」当たった場合、ある一つの国民経済は世界分業システムにおける地位を保全することができるし、その国家は、国際的な国民国家システムにおけるそのステータスを維持することができる。まとめるならば、国家の諸政策は、世界資本主義システムにおける当の国民経済が占める位置によって最終審において決定されている——言い換えれば国家が遂行する諸政策の効果が限界づけられる——のである。

資本主義国家と資本との関係は、ここから明確になるであろう。資本主義国家は、資本制生産という搾取のシステムの維持保存とその利潤率の向上にたいして、本質的な利害関係をもってしまっている。すでに指摘したように、個別資本や個別資本家による「強欲」に駆られた暴走は、資本主義システム全体にたいする潰乱要因となりうるのであり、資本主義国家は「公共の利害」のもとに介入する必要に迫られるだろう。たしかに、歴史を顧みるならば、支配階級というものが存在し、それが国家の運営に深く関わっていたことが観察されうるかもしれない

い。しかしながら、資本主義企業において、経営と所有が分離し、個別資本家の個別利害（目先の強欲や親族経営の内紛など）に振り回されることなく資本の論理を貫徹することができるようになったのと同じような事態が、資本主義国家においても起こっているのではないだろうか。それは、それに寄生する支配階級からの資本主義国家の分離という事態である。資本主義国家は、ますます個別の階級利害よりも資本主義システムそれじたいの利害を考慮するようになっていくし、国家間の競争を通じてそうなるよう駆り立てられてもいる。それが十全に完遂されることは望めないにしても、国家の野望は、階級利害によってもはや左右されることのない階級政治であるように思われる。つまり、資本主義という搾取のシステムそれ自体の維持発展へと、資本主義国家の政治は向かおうとしている。「支配階級なき階級支配」というべきものが資本主義国家の中核に据えられるのではないだろうか。

4. 国家の駆動因

ところで、階級闘争からの国家の分離を主張しているといっても、アルチュセールの国家論における国家と階級闘争の関係はより複雑である。むしろプーランツァスよりも、国家と階級闘争の関係をアルチュセールは原理的に捉えようとしているのかもしれない。レーニンそしてウェーバーが強調していた国家装置における暴力の位相をアルチュセールもまた強調するのだが、しかしながら「暴力によって作動する装置」という極めて特異な概念が導入されるのだ。

〔国家が階級闘争から分離されている〕本質的な理由を探り当てるには、国家の「軍隊」、部分的にしか目に入っていないその物理的強さ（*puissance physique*）のほうを

見なくてはならない。〔中略〕国家が「特別な装置」であるのは、それが社会の他のどの組織とも違い、「公的暴力で作動する」からである。この〔国家の〕武力の一部、すなわち軍隊は、ほとんどの場合不可視である。ただが残りの兵力はすべて、日ごとに目に入り、絶えず介入を行っている。（中略）国中に、あらゆる活動にわたって張り巡らされている検問、制裁、監視の広大な網の目を考えてみれば、また、この広大な網の目の物質的条件は、武器、監獄、あらゆる次元にわたる監視施設を備えた合法的で公的な物理的力が存在することであると知れば、人は気づく。物理的力（*force physique*）が国家において果たす役割を、いままでたぶん過小評価してきたのだ、と。おそらく、根本的にはこれこそ、国家という特別な装置が非常に「特別な」性格をもつ理由をなしている。政治装置であれ、イデオロギー装置であれ、国家のなかで、国家の名において機能するものは、なんであれ、武装された公的物理力が存在し現前することによって、密かに支えられているのである。この物理力が全面的に可視的で、全面的に行使されているわけではないということ、それどころか、じつにしばしば、それは完結的にしか介入してこないということ、あるいは、隠蔽され不可視であるということ、これもまた、当の物理力の存在形態、作用形態の一つなのだ。（Althusser 1978a 460-461 傍点強調は原文に従う）

ここで留意すべきは、公的暴力とは国家が担う機能というよりも、むしろ国家装置を駆動している作動因という点である。機能ではなく作動因から国家装置の性格に迫ること、これは小さな視座転換にも見えるが、国家論の理論的土

俵替えを迫るものに思われる。なぜなら、国家と暴力の関係を思考するにあたって、われわれは専ら国家の機能として暴力を思考してきたからだ。

国家装置への階級闘争の浸透を説明するうえで、アルチュセールによる国家装置の作動因論は示唆的である。アルチュセールによれば、階級闘争が直接に国家装置に入るのではない。国家に入るのは、階級闘争というよりも公的物理力だからだ。では、公的物理力とは何か。アルチュセールにあっては、階級はそれ自体力（force）なのだが、階級闘争とはこの力と力の角逐（affrontement de forces）に他ならない。そして、この力と力の角逐の結果生じる、対立する力の超過分（excès de force conflictuel）——それは物理力（force）ないし暴力（violence）という形態をとりうる——が国家装置のなかに入ったものこそが公的暴力である（Althusser 1978a 468）。この公的物理力は、国家装置に入り、権利体系、法律、規範へと変換される。すなわち、階級闘争における力と力の角逐の超過分としての力（force）や暴力（violence）が、国家装置をへて権力（pouvoir）へと変換される。この仮説に従えば、国家装置に入るのは、階級闘争そのものではなく、階級闘争における諸力の角逐から生じる力ないし暴力の超過分と考えられる。そして、諸階級の勢力の推移、さらに諸力の角逐における合力・跳ね返り・分散・反動などの物理的反応によって、「力ないし暴力の超過分」は著しい動態におかれているのであり、そこにあからさまに階級的なアイデンティティを認めるのは困難である。それが国家装置の作動がかくも複雑で、時には矛盾に貫かれている原因なのではないか。また国家において階級闘争の直接的な発現や露骨な階級政治はまずありえない——逆に言えば、そのような事態は国家にとってあまりにも危険である。

ところでアルチュセールの国家論に対しては、国家装置の機能を抑圧とイデオロギーに限定してしまっている、という批判がなされてきた。この批判はアルチュセール派の内部からも行われている。たとえばプーランツァスも国家の機能の一つとしてコンセンサス・ポリティクスをあげなければならないと述べる。すなわち、支配階級と被支配階級のあいだの妥協を取り付けるため、国家は物質的な基盤（ありていにいえば、経済的保障）を提供しなければならないからである。そこで、プーランツァスは「国家の経済装置」の存在を示唆するわけである（Poulantzas 1978 20）。しかしながら、このような批判は誤読であることはすでに明かだろう。アルチュセールは、機能において国家装置を区別したわけではない。アルチュセールにしたがえば、あらゆる国家装置の機能は、生産諸関係の作動を保障すること、そして生産諸関係の再生産を保障することに集約される。国家装置のアルチュセールのな区別は装置の作動因のほうにある。アルチュセールは、わざわざエンジンの比喩をもちいて、抑圧装置とイデオロギー装置の作動因の違いを強調している。すなわち、国家装置と国家のイデオロギー装置との差異は、イデオロギーによって作動するか、暴力によって作動するかの差異である——もちろんこの差異は最終審においては消え去る、なぜならばあらゆる国家装置はすべて公的暴力によって密かに支えられているからである。階級諸闘争の帰結・効果としての公的暴力によって駆動される装置、これがアルチュセールによって新たに拡張された資本主義国家の概念であるといえよう。

このように、国家の階級闘争からの分離を主張するアルチュセールにあっては、両者の関係が思考されていないわけではない。むしろ逆である。問題は、国家装置のなかへの階級闘争の

「入り」方ということになる。国家に階級闘争が直接に現れるものではない、複雑な階級闘争プロセスの結果として幾重にも媒介され、物理的変換を被った力が国家に入り込むのである。

おわりに

アルチュセールとプーランツァスの国家論における差異

たしかに、プーランツァスとアルチュセールは相反する国家認識に到達したようにも見える。しかし、アルチュセールの国家論テーゼとそこから展開された分析を考慮するならば、国家における階級闘争の直接的な横断と現前を主張するのは難しい。プーランツァスもまた「国家は力関係に還元されるものではなく、固有の不透明さと抵抗を呈している。諸階級の力関係の変化は、たしかに常に国家のうちに影響を及ぼすが、しかし直接的かつ即時的な形で現れるのではない」(Poulantzas 1978 18)と指摘している。ところが、その留保にもかかわらず、プーランツァスが国家と階級闘争とを直接的に結びつけようとしていることも確かである。ひるがえって、アルチュセールが国家への階級闘争の不可侵性を言い募っているわけでもない。アルチュセールは、階級闘争にたいする国家の「固有の不透明さと抵抗」を強調し、理論化したといっ
てよい。国家に階級諸闘争は直接には出現しない。むしろ、国家へと凝集されるのは、階級諸闘争における力と力の角逐の超過分が複雑なプロセスをへて媒介・加工されたものであるというアルチュセールの認識は正しい。したがって、国家を「階級闘争の力関係の物質的凝集」と捉えるプーランツァスのテーゼは、その「物質」性の不透明さ・不確かさ、さらに「凝集」のプロセスの複雑性を強調する形で、修正される必要があるだろう。その場合、階級闘争の力関係

の物質的凝集としての装置、そして階級闘争から分離された装置というそれぞれの国家概念が矛盾をきたすわけではない。アルチュセールそしてプーランツァスが切り開いた新たなマルクス主義国家論の領野のさらなる探求はこれからの課題であるが、二人の差異・対立点を突き詰めることによって資本主義国家概念が練り上げられたことも確かである。もちろん、国家と資本そして階級闘争の三者関係は、歴史的変動のダイナミズムのただなかにある。私たちの理論的探究も、理論の深化とともに変動への対処が求められるであろう。

引用文献

- Althusser, Louis 1969 “Idéologie et appareils idéologiques d'Etat.” *Positions*. Paris: Editions sociales Paris: PUF, 1995. ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『国家とイデオロギー』 西川長夫訳 福村出版、一九七五年。
 1972 “Marxisme et lutte de classe.” *Positions*. Paris: Editions sociales, 1976. 「マルクス主義と階級闘争」『自己批判：マルクス主義と階級闘争』 西川長夫訳 福村出版、一九七八年。
 1974 *Philosophie et philosophie spontanée des savants*. Paris: F. Maspero, 1974. 『科学者のための哲学講義』 西川・阪上・塩沢訳 福村出版 一九七七年。
 1975 “Soutenance d'Amiens.” *Solitude de Machiavel*. Paris: PUF, 1998. 「アミアンの口頭弁論」『マキャベリの孤独』 福井和美訳 藤原書店、二〇〇一年。
 1978 “Marx dans ses limites.” *Ecrits philosophiques et politique*. Paris: Stock, 1994. 「自らの限界にあるマルクス」『政治哲学論集』 I 市田・福井訳 藤原書店、一九九九年。
 1995 *Sur la Reproduction*, PUF, ルイ・アルチュセール (2005) 西川長夫・大中一彌・山家歩・伊吹浩一・今野晃訳 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『再生産について—イデオロギーと国家のイデオロギー諸置』 平凡社

- Poulantzas, Nicos. 1968 *Pouvoir politique et classes sociales de l'Etat capitaliste*. Paris: F. Maspero, 1982. 『資本主義国家の構造』田口・綱井・山岸 訳 未来社、一九八一年。
- …………… 1978. *L'Etat, le pouvoir, le socialisme*. Paris: PUF. 『国家・権力・社会主義』田中・柳 内訳 ユニテ、一九八四年。
- Engels, Friedrich. 1891 Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats in: *MEW* Bd. 21. 『家族・私有財産・国家の起源』、『マルクス＝エンゲルス全集』第二一卷（引用の訳文頁づけは邦訳による）。
- Laclau, Ernest and Chantal Mouffe. *Hegemony and Socialist Strategy: Second Edition*. London: Verso, 2001. エルネスト・ラクラウ／シャンタル・ムフ 『ポスト・マルクス主義と政治』山崎・石沢 訳 大月書店、二〇〇〇年。
- Marx, Karl 1893 *Das Kapital*, Bd. III in: *MEW* Bd. 25. 『資本論』第三巻 向坂逸郎訳 岩波書店、一九六七年（引用の訳文頁づけは邦訳による）。
- Foucault, Michel 1981 “Les mailles du pouvoir” *Dits et Ecrits 1954-1988* III Paris: Gallimard, .
- Jessop, Bob *Nicos Poulantzas: Marxist Theory and Political Strategy*. London: Macmillan, 1985. 田口 富久治監訳 『プーランザスを読む——マルクス主義理論と政治戦略』合同出版、1987年